

らいぶ倉庫LIVE CREATATOR

NO.23
2005.1.17

研究広報誌

CONTENTS

「意味と内容」が
ひろがる学びの創造
まなざしの共有によって

●教育研究発表会を終えて	1
●らいぶレポート 研究会授業報告	2・3
●学習紹介 「ぼくらはみんな生きている」(2Bみらい)	4
●学習紹介 「ほんまもん和歌山!伝統の業」(4A社会)	5
●学習紹介 「ヒトと動物の体・大地は語る」(6A理科)	6
●学習紹介 「『見る・聴く・愛する』力を育てる音楽科授業」(音楽専科)	7
●わたしの学校 HOT LINE 「日本再発見」近畿生活科研案内	8

2004年度教育研究発表会を終えて

研究企画長 愛須 一弘

11月19日に教育研究発表会を行った。

私自身の授業は、2コマ目だったので、1コマ目は仲間の授業を観て回った。

授業というものは観る側になるとよくわかる。だがそこには、誰も手を出すこともできなければ、手を貸すこともできない指導者と子どもがつくる空間があり、また時間の経過がある。

題材の導入場面ですでに、「意味と内容」がひろがる可能性に欠けていることが見えてしまったり、逆に、そのときの追求の様相から、ねらいとする本質に迫ることが予感できたり、或いは、子どもたちのまなざしから、学び方そのものの質の高まりが伝わってきたり…と。

参観しながら、自分の授業では、子どもたちといっしょに、誰も手を加えたいと思う必要のない学習を創ることだけを考えていた。それは、教師になって幾度も繰り返し経験してきた瞬間でもある。

今年度は、「意味と内容」がひろがる学びの創造——まなざしの共有によって——を研究主題としての授業であった。どんなテーマであっても、毎年、研究会が近づいてくると、私は、『子どもたちの学ぶ姿で理念の証明ができるか』を確かめるために、『自身の実践研究に対する意欲が、深くよりよいものを求めていくこうとするまでの追究的な態度にまで高まっているか』を確かめるために、本棚から『斎藤喜博著』と書かれた本を手にとる。

今回は、『授業の展開』であった。

…。そういう教師たちは、新しい人間的なタイプを持っており、子どもを大事にもしたので、子どもをそこなうということもしなかった。子どもたちにも好かれだし、子どもたちも人間的に明るくなり、連帯感も持っていた。

しかしそういう人たちの授業や教室をみていると、そこには何か足りないものがあった。子どもも教室も明るく楽しそうなのだが、学習によってきびしく追求していくということが欠けていた。それはその教師が人間性だけで授業をやっており、感性的にしか授業という仕事をやっていなかったからだ。低い人間性とか感性的なものとかの、低いところでよいとしているからだ。したがって、甘やかしたり、にちゃにちゃするときはよいが、個人や学級全体で、新しいものをつくり出し、相互に否定し合いきびしく追求していくことはできないのだった。つまり、人間的な授業とか学級づくりとかはしているが、学級づくりも授業も甘いものだということになる。

授業はそういうものであってはならない。教材を対象にし、媒介にしながら、教師はあくまでも授業展開の主体になって、教師と子ども、子どもと子どもが激しく衝突し、そのなかから、つぎつぎ新しいものを発見し、学級全体や個人を変革していくようなものでなければならない。その場合大事なことは、授業展開の主体となる教師に人間としての豊かな教養とか体験とかがあることである。豊かな教師の人間の全部をぶつけてはじめて、授業は豊かに展開するからである。教育科学も、そういう教師がおり、そういう授業ができたときはじめて生きてくる。すぐれた武器となってくるはずである。

[斎藤喜博全集 第6巻『授業の展開』(国社 1977) より]

次の LIVE 創 REATOR では、今後の実践研究の方向についてお伝えできることと思います。

1C 辻本郁夫 みらい**あそびめいじん**

おじいさん・おばあさんにお手玉、ヨーヨー等を教えてもらいました。遊びに興じる中で伝承遊びの特質に気づく子供もいました。

次は、これらの伝統を岡山幼稚園の園児に伝えることを通して交流を図っていきます。

**2A 仲藤千尋 工****さわって かわって**

小麦粉のステキなへんしん「さらさら」「ふわふわ」「ころころ」「ねとねと」…他にもいっぱい！そんな小麦粉の感触をたっぷり味わったり、思い浮かべたものをのびのびとつくりながら、全身を使って表現しました。

**2C 塚越美 音楽****いい音さかして**

『かじやのボルカ』の聴き所は金床の音色！まねっこ一番人気は指揮者！オーケストラの演奏を見て聴いた後は、自分もオーケストラの一員になったつもりで演奏をする真似をしたけれど、金床のいい音聴きながらできたかな？

**3A 山崎立也 社会****わが町のはたらく人たち**

給食のパンを作ってくれているパン屋のおじさん。子どもたち各自が見学から持った疑問を解決しようと、おじさんの考え方や仕事ぶりをいろんな角度から見つめていくことで、おじさんのすごさを浮かび上がらせました。

**3C 仲藤千尋 国語****物語の世界へ モチモチの木**

豆太の「心のエネルギー」と、その「エネルギーの素(種)」について子供達なりの多様な考えを出し合いました。授業後は「齊藤隆介作品」に流れるテーマについて物語を読みながら考えを深めました。

**4B 梅本優子 算数****分 數**

「新発売！○チップ？」さて、ポテトチップスの箱のサイズは…？1より大きい分数の表し方を考えました。悩みながら、操作しながら、『基準量1』や『 $\frac{1}{8}$ 』のたいせつさに気づくことができました。「分数って奥が深い…」子どもの本音でした。

**研究授業 1****5A 顧ゆ記 家庭****わが家のふれ合いづくり**

住宅に取り入れられ工夫調べを通して、より快適な住まいについての学習を行いました。家庭なら家族とともに、学校なら仲間とともに、より楽しく過ごせるための空間づくりについて、話し合いました。冬休みには、ぜひ、自分の家で実践してね。

**5B 石橋諒輔 体育****ソフトバレーボール**

ボールを落とさないようにする、「緊張感」と「一体感」を味わうための単元構成をしました。ネット型は、ただ単に勝敗を競いあうより、ラリーを続けるというゲーム内容が子どもたちの欲求になるという提案をしたことは、間違いではなかったと感じました。

**5C 辻本和琴 理科****おもいか動くとき**

課題選択単元を複式学級のような授業形態で行いました。「振り子」「衝突」共に熱心に実験し、意見交流では、データの見方に焦点を絞った話し合いが行われ、正確さを高める方法と誤差としての見方を学びました。

**6A 不懶誠 理科****大地は語る**

私たちが日々何気なく暮らしている足下には46億年という長きにわたって変動を繰り返してきた大地の物語があります。その一部である7000万年前の和泉山脈の岩石から空間的時間的な旅へと出発しました。

**6C 志場俊之 国語****生き方に考える「海の命」**

「与吉じいさから教わった千匹に一匹」という言葉から太一が思うようになった海の命という考え方には、海のめぐみという父の思いを越えた、海とともに生きる本当の一人前の漁師になったことを証明する考え方だ。」

**5F 鈴嶋暉 算数****面積・体積**

同じ教室で2学年がそれぞれの学習を展開する学年別学習。自分の考えを解ってもらおうと必死になって説明する子。そしてそれを解こうと努力する友だち。アットホームな雰囲気の中に見えない思考のビームが飛び交う。



1A 池田彦男 算数

ひき算(2)

くり下がりのあるひき算は、1年生の子どもたちにとって、最も難しい単元です。計算の方法を考え、図にかいたり言葉にしたりしながら伝え合いました。10のまとまりで考えることに気づいていきました。



1B 北山穂美 国語

バスのひみつ

型紙に色を塗って、指でこります。さて、型紙を外すとどんなになっているかな?わくわく、どきどき…。真黒な画面にどんな色がでてくるかな?スクラッチも楽しかったね。みんな夢中で、バスのひみつを探していました。



2B 須佐 宏 国語

『お手紙』

~かえるくんにひいて音符を刺さう!~秘密にしていた「お手紙」のことを自分から言ってしまったかえるくん。言う前と言った後でかえるくんの心の風船の変化は?なるほど、なるほど。かえるくんがなぜ自分から言ってしまったのかが見えてきたかな。



3B 中筋美惠 理科

覗!じしゃくのひみつ

1つの磁石の中でパワーナンバー1はどこだろう?パワーの弱い部分を切つみるとどうなるのかな?N極とS極の境目で切るとくっつかないかも?どんどん試してみる中で、新しい磁石のひみつを見つけました。



4A 片桐 宏 社会

ほんまもん和歌山!

「伝統の業(わざ)」伝統工業である紀州漆器の将来について話し合いました。そこで、現在の紀州漆器の問題点を知るとともに、見学させてもらつた、「漆塗り師」谷岡さんの紀州漆器にかける思いや願いを深く考えることができました。



4C 中井章博 理科

めざせ!お茶の“水”博士

~温度や力との変化~ “水”はどのようにあたたまるのかな?予想を立て、それを確かめるため、子どもたちは自分で考えた方法で実験を行いました。本時では、互いの実験結果・考察を比較し、検討することで、“水”的なアタマ方について追究することができました。



5A 爰須一弘 算数

式と計算

本時の課題を追求する子どもたちは、その後、一辺に並ぶ●の数を変えたり、辺の数を変えて別の形にしたり、二重に並べたり、立方体の各辺に●を置いてみたり…と、「意味と内容」がひろがる契機を自分たちで創っていました。



5C 沖香寿美 国語

地球環境について考えよう

「一秒が一年をこわす」を読む中で、さまざまな環境についての問題をもちました。滅びようとしている動物とは?砂漠化している地域とは?など、読めば読むほどわからないことが増えてきました。これらの問題を他の資料を使って調べ解決しています。



6B 田中ばみ 社会

紀州徳川家八代將軍吉宗

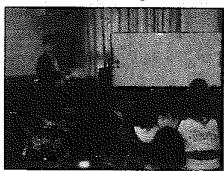
「徳川吉宗」が今に残したものと、自分とのつながりを探りました。東照宮、岡の宮、和歌山城、質素儀約…。「もし吉宗が今を見たらどう思うか?」「自分が受け継いで残していくなければならないことは?」子どもたちの考えが交差し合う楽しい授業になりました。



6C 江田 司 音楽

私のお薦め30曲!

はたして子どもの「お薦め曲」が増えるのか?本時は、日本で一番聴かれていない音楽《義太夫節》を取り上げました(『三十三間堂棟由来』から「平太郎の段」)。たった30秒間の声と三味線に心奪われる子どもたち。



12F 松尾浩一 みらい

のりものたんけんたい

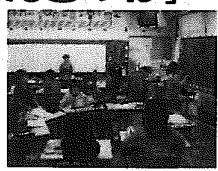
バスで働く人の苦労を運転手さんと整備の人の仕事ぶりから追求しました。「運転手さんは見ている。」という発言を契機に利用者のことを考えて働いていることに気づき、追求が追究へと意味と内容がひろがりました。



34F 酒井充司 国語

3年:「モチモチの木」
4年:「ごんぎつね」

3年生は子どもが書いた『じさまへの手紙』とともに、4年生は子どもたちが作った問題を中心、豆太とじさま、ごんと兵十の気持ちの移り変わりについて読み深めました。子どものまなざしから出発したので、意欲的に学べました。



研究授業2

みらいの学習

ほくらはみんな生きている♪

～「いのち」の大切さを考えよう！～

2B 担任 須佐 宏



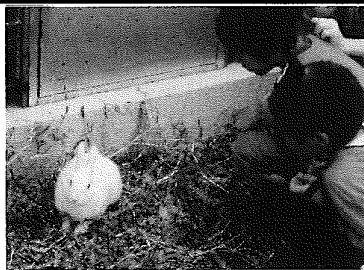
2Bみらいの年間テーマは、「いのちの大切さについて考える」である。2学期は、校内事情によって飼い主のいなくなったうさぎのお世話を引き受けることになった。1学期の栽培、採集、飼育経験を活かしながら、「うさぎの飼育」を通して「いのち」とふれあうことに重点をおいて学習を進めてきた。



飼育開始前には飼育小屋まわりを大清掃

1学期末に全校アンケートをとり、賛成多数で学校のうさぎの飼育を2Bに任せてもらえることに。でも反対票の中には「2年生が本当に世話できるのか心配。」「殺してしまわないか心配。」「ウンチの片付けとか大変だから続けられないと思う。」「赤ちゃんが産まれたら3年生になるときどうするの？そこまで考えてないとだめ。」などの意見も。飼育の開始にあたっては、それらの意見を再度確認し、話し合いながらのスタートとなった。

初めはなかなかつかず、苦戦していたが、子どもたちの熱意が通じたのか、少しずつ抱っこしたり、えさをやったりできるようになっていった。

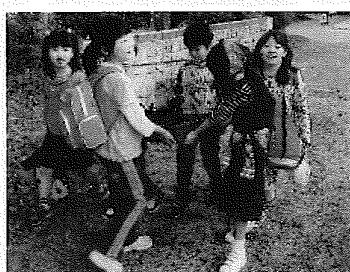


こわがってなかなか近づかせてくれない「うっくん」



心音も聞かせていただいた。

当番を決めて実際に飼育を始めてみると、わからないことや不思議なことがうまれてきた。うさぎを家で飼っている子が教えたり、本で調べたりして自分たちなりに解決策を考えた。それでもわからないことや不思議なことを専門家である獣医師の先生に来ていただいて教えてもらうことに。「赤ちゃんを育ててみたい。」という思いを強く抱く子が増えたので、獣医師の先生には、雌雄の判別と妊娠可能であるかについても教えていただいた。診断の結果、「うっちゃん」は去勢した雄であることがわかり、「うっくん」に改名した。



3頭のうさぎさんが学校に到着。

子どもたちは、すぐに自分の住んでいる地域の学校の飼育状況を調べにかかった。そして、ちょうどもらいたい手を探している学校があることを知り、みんなで出向いていく、オス1頭、メス2頭をいただいた。(※うさぎの数え方としては1羽、2羽…が一般的であるが、正しくは1頭、2頭…ということも学習した。)オスにはデール、メスにはコーラ、くっちゃんという名前をつけた。現在は、当番を決めて飼育をしながら、えさにするためのニンジンを栽培したり、赤ちゃんが産まれる時にはどう接すればよいかを調べたりしている。また、どうすれば新しい命は誕生するのかについても、様々な生き物の交尾を取り上げて学習した。子どもたちは、来年度以降も(自分たちが2Bとして活動できなくなったときも)「うさぎボランティア」を作り、自分たちが中心になって飼育を続けていくことを決めている。年末から年始にかけて妊娠・出産があるかもしれないという期待を抱きながら、子どもたちはうさぎの飼育を続けている。

子どもたちには、自分たちがあずかたいのちを大切にしようとする姿が見られる。3学期は、いのちの誕生を中心に行うことや自分の生い立ちを振り返ることを通して、自分、友だち、そして身の回りの全てのもののいのちの大切さに気づいてもらいたいと願っている。また、芽生えつつある責任感が、他の自分の役割(日直の仕事やかかりの仕事)にもいきつくることを願っている。

4 A 社会科

ほんまもん和歌山！「伝統の業(わざ)」

4年A組 担任 片桐 宏

◎紀州漆器のひみつをさぐろう！（海南市黒江の見学）

約500年間も続いている伝統工業である紀州漆器にスポットを当て、学習をすすめました。見学では、伝統工芸士の谷岡さんの工房を訪ね、実際に「漆塗り」を目の当たりに見せていただきました。伝統的な手法で、今も紀州漆器をつくり続けている谷岡さん。子ども達も、「漆塗り」をする谷岡さんから多くのことを感じました。また、紀州漆器伝統産業会館で蒔絵の体験教室も行いました。見学後、さらに調べてみたいことについて話し合うと、谷岡さんの仕事の様子や紀州漆器の材料・工程・歴史などに関する多くの意見が出ました。谷岡さんの「漆塗り」に対するこだわりに触れながら、紀州漆器の将来について考える学習課題が生まれました。



◎谷岡さんの、紀州漆器にかける思いや願いを中心にしながら、紀州漆器の今後を考えてみよう。

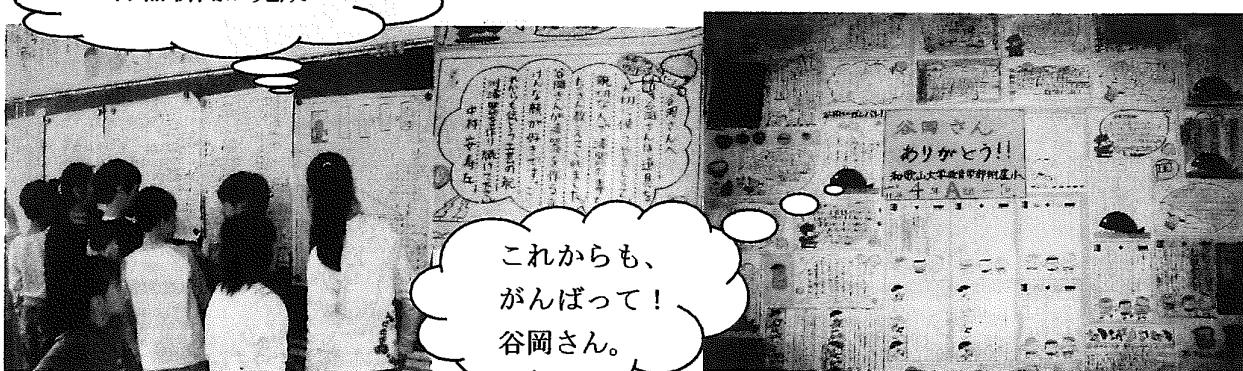
みんなで、谷岡さんの生き方や紀州漆器にかける思い・願いについて深く考えながら、紀州漆器の将来について話し合いました。売り上げが減っていることや後継者問題などの多くの課題がある紀州漆器に対して、子ども達なりにしつかり考えた意見の交流が見られました。漆器に携わる人々の生き方や考え方を知る中で、子ども達には、「紀州漆器が今後も発展してほしいな。」という願いが強くなりました。



漆器新聞が完成！

◎谷岡さん・紀州漆器、がんばれ大作戦！！

谷岡さん・紀州漆器を、子どもなりに応援する方法を考えました。谷岡さんにお礼の気持ちをこめて手紙を書くこととグループごとに漆器新聞をつくることになりました。伝統工業を存続させるべく努力している人々に対する思いがいっそう深まった取り組みになりました。後日、手紙と漆器新聞を谷岡さんの工房と、紀州漆器伝統産業会館に届けたところ、とても喜んで掲示してくれました。



これからも、
がんばって！
谷岡さん。

6A理科

「ヒトと動物の体」・「大地は語る」における
《未知との遭遇》

担任：不野和哉

私がめざす理科学習とは、子どもが自然に対してもつ素朴な概念を、学びあう仲間と共に楽しく問題解決を行う過程を経て、より科学的な見方・考え方へ変容させていくことがあります。そして、その過程で起こる感動体験は、「理科はおもしろい！」と、子どもを理科のとりこにしてくれるのではないかと思うのです。ゆえに、そこで行われる問題解決は、私が子ども達に問題を投げかけて、それを解くといったことであってはいけないはずです。自然の事物・現象との出会いから「え？ どうして？」「なぜ？」と子どもが今もっている概念や経験では説明できない疑問や矛盾に問題意識をもち、それを自らが追求と追究を繰り返す中で、その説明できない「？」が説明できるようになったときに、問題解決が成功したと言えるのだと思います。すなわち、問題解決とは、《未知を知にする》創造的・生産的な思考を意味するのではないでしょうか。理科を担当する私は、子ども達に、いかに、どのような未知との遭遇をさせえるかについて、スピルバーグ監督に負けじと日々悶々と子ども達の身近な生活の中に未知を探索し続けるのです。



☆未知との遭遇パートⅠ「ヒトと動物の体」☆

食べるという日常的な活動を改めて見直す中で、自分の体の中に生きるための素晴らしいしくみとはたらきがあることを再認識していきます。

<イカやアジを解剖>

噛んでるとご飯がメチャ甘くなってきたぞ。

よく噛むとだ液と混ざってドロドロになって、それで消化しやすくなるって読んだけど…

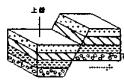
それじゃ甘くなるのも消化と関係ある？

(ご飯を炊いて試食会)

噛んだ回数別のご飯にヨウ素液をかけると…？！

図鑑のようにはわかんないね。これ、ひょっとして胃じゃない？

切ってみる？ 胃だったら何か食べたもの出てくるかもしれませんよ。



☆未知との遭遇パートⅡ「大地は語る」☆

推論と確証を楽しみながら、日々何気なく生活している足下にある46億年という長きにわたる大地のドラマを解きほぐしていきます。

<加太海岸の地層を見学>

お城の石垣って岩だよなあ。何で岩の穴の中から砂なんて出てくるん？ 岩って何？

地層って水平じゃないの？

何でこれ斜めなん？

海の中まで入ってるで。どこまで続いてんの？

黒い岩はボロボロ落ちるぞ。でも白いのはかたいよ。これ何ができるんだろう？

和歌山城散策

**音楽科 「見る・聴く・愛する」力を育てる音楽科学習
～まなざしの共有を軸に、小・中を通した学びの広がりを考える～**

音楽専科 江田 司



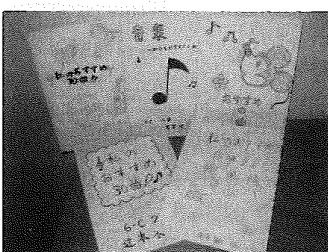
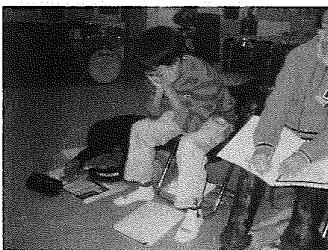
●2ヶ月半で8000曲のお気に入りを集めたら6年生の子どもたち！！

10月から本格的に始めた「私のお薦め30曲！」。この学習は、自分なりによさを見つけた曲をみんなに紹介していく。自分で演奏したり踊ったり、CD・MD・DVD・Videoで発表する。もちろん、音楽にはさまざまな種類があるから、教師は、子どもたちが手の届かないたくさんの鑑賞曲（例：下の表）を用意する。発表の手助けもする。はじめはなかなか30曲に届かなかったが、12月に入って、6年生109名が延べ8,046曲を集めた。1人平均=74曲である。現時点の最高は271曲。全員が、まだ伸び続けている。85%の子どもが30曲を、そして50%が60曲をクリアしている。

本学習で子どもたちに求めるのは、いろいろな音楽が持つ《よさ》に気付くことである。

●友達のよさに気付く子どもたち

音楽教室に幾度となくポップスが流れる。聴くねらいを設定する。「サビを聴き取る（挙手）」「歌詞を聴き取る（歌詞そのもの。あるいは、題名に関係のある言葉など）」「声の重なりや違いを聴き取る」「伴奏で使われている楽器を聴き取る」「インストロのメロディを一度で覚える（集中力がないとき）」等々である。これらは結構、聴く力を付ける。また「どこが好きなの？」「どうして好きなの？」との質問は、友だちがどこに《よさ》を見いだしているのかを知つて聴く手がかりとなる。そんな中、ポップス大好きな子たちとは逆にクラシックのみ51曲も集めていたT君。憂鬱そうな顔をしていた。ポップスを紹介する子どもたちに注意を促すと、「T君。これならどう（気に入る）？」と、彼の曲の好みをもとに、いろいろと曲を探してくるようになった。T君が紹介する『メヌエットK.334』や『カノン』には、「心が安まる」とクラスの半数以上の支持が集まるからである。いまではポップスのよさも分かるT君。T君を通して私が紹介するいろんなクラシックのよさも分かるクラスの仲間たち。そればかりではない。「文楽を見に行きたい」「冬休みに、『クラシック~100』（貸し出しCD）を聴きたい」と、続々である。



- ①バロック音楽：協奏曲『四季』作品8から『春』（ヴィヴァルディ）
CD聴き比べ（バイヤールとヴェニス・バロック）とDVD映像（イ・ムジチ）
- ②文楽・義太夫：『三十三間堂棟由来』から「平太郎住家」CDとLD（DVDに編集）映像
(ザルツブルク・マリオネット劇場「フィガロの結婚」との比較を含む)
- ③協奏曲：ピアノ協奏曲第2番ハ短調 第1楽章（ラフマニノフ）LD映像（B・ダグラス）
- ④民族音楽：『River dance in N.Y.』から「リバーダンス」他、DVD映像
- ⑤現代音楽：『糸団』-若い人たちのための音楽詩-から（武満徹・谷川俊太郎）CD・Video
- ⑥管弦楽曲：『眠りの森の美女』から「ワルツ」[Once upon a dream]（チャイコフスキイ）
- ⑦交響曲：ジョン・ミョンファン特別授業～小学生の『運命』(NHK番組『未来への教室』)
:ジョン・ミョンファン『音楽の贈り物』
:交響曲第4番へ短調から第4楽章（チャイコフスキイ）LD（カラヤン B.P.O.）他。
- ⑧『クラシック・ベスト・ヒットMORE 100』(100曲の聴きどころ：ワーナー)

●今後も、附属小・中と大学の連携をはかる～子どもの育ちを保障する

昨年11月の教育研究発表会では、初の小・中合同の協議会となった。

また、大学からは実習以外に、年間延べ300人近く学生たちの授業参観（レポート付き）がある。

「日本」再発見

竹光真佐人



私は、いろいろな国を見て回る事が好きでした。もう、四半世紀も前の話になりますが1970年代にイギリスの田舎町に滞在していたときの事です。公園で小説を片手に日向ぼっこしながらゆったりと時を過ごしていました。そんな時、簡単な挨拶の後「あなたは、中国よりおいでになったのですか。」という「お尋ね」をされたことがよくありました。私はその都度「いいえ、中国の東隣の日本から来たのですよ。」と答えました。その後、必ずと言っていいほど話題に上ったことは「日本文化」についてでした。私は歴史的な事項も交えながら「日本文化」について知っている限りを話したものでした。

さて、私がこれらの「出会い旅」の起点となった一つに、外国文学の影響があります。「シェイクスピアの戯曲」については、感動したと言いましても「原文」を読み「英文」を楽しんだのではありませんでした。これには「福田恆存氏」や様々な翻訳者による「日本語」の仲介があったからこそなのです。日本語でありますながら少し難解で流麗かつ芸術的な表現に感動したものです。それが原作の良さをなお一層引き立ててくれたのでしょう。「アポリネールの詩」の場合もそうでした。翻訳された味わい深い繊細な文章に魅せられて、セーヌ川沿いの地域をゆったりと作品をたどる旅をしたものです。この様に私は「美しい日本語」を媒介に外国に思いを馳せて旅立ったものでした。

さて、話を現在に移しますと、何かと「国際化」がクローズアップされ、話題に上ることが多くなっています。そこで、私がお話ししたい事は「国際化」と対をなす「日本」についてです。子供達は今「日本文化」のすばらしさについて十分理解しているでしょうか。「日本語」の美しい表現を理解したり、きちんと使ったりできているのでしょうか。どういった疑問が浮かんできます。

最近の日本語事情を考えますと、会話は「文」としてではなく「単語」の羅列になっていたり、文法的におかしな表現が流行のように使われてみたり、不思議な造語がまかり通っていたりしているようにさえ感じます。また、子供達が家庭内で交わす会話を聞いてみると、十数個程度の単語で済ましてしまっているような気さえします。この様な現状を考えると「日本語教育」の重要性を感じるわけです。

私は「国際化時代を生きる」上で「日本語教育」は極めて大切な役割を担っているように思っています。日本語を正しく使いこなせることが、日本文化を理解し尊重していくためにも重要なことだと思います。ここで始めて異国の文化についての理解や尊重する態度が芽生え、眞の国際化が実現していくのではないかと考えています。

一方、異国から学ばなければならない事や、直接的に受け入れなければならないところも多々あるように思われます。この様なとき、「無作為に外国の良いところを取り入れる。」ではなく、日本料理の食材の多くや伝統的な生産物の原材料を輸入し上手に利用しているように「日本流の」「日本味をベースにした」「日本味をえた」上で、どう取り入れるかという活用方法も大切な事だと思います。

日本語に対する理解や態度が、「日本文化」に対する理解や尊重につながり、やがて異国の文化について理解や尊重する態度がさらに深いものになっていくのではないかと考えています。この様に考えると「国際化」における「日本語」の果たしている役割はとても重要であります。

そこで、私は「国際化」について基本的な事項の一つが「日本語力」の育成ではないかと考えています。

●研究発表会のご案内●

第7回 近畿地区小学校生活科教育研究協議大会 和歌山大会（実践交流会）

日時：平成17年2月4日（金）9:30~16:45 会場：和歌山大学教育学部附属小学校

主催：近畿地区小学校生活科教育研究協議会 和歌山市小学校教育研究会生活科部会

後援：和歌山県教育委員会・和歌山市教育委員会

大会主題：「子どもの自立への基礎をはぐくむ生活科をめざして」

内容：午前（6府県実践交流会） 午後（附属小教諭による6公開授業・講演会等）

講師：有馬理恵（劇団俳優座）「私を育てた風土」 参加費：3,000円《和歌山市は徴収済み》

From Editors

新年あけましておめでとうございます。昨年11月の研究会には、多数ご参加いただきありがとうございました。ご意見・ご感想を右記宛にお寄せ下されば幸いです。

今後とも御指導よろしくお願ひ致します。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105 FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp